

「循環」再ハッケン!

# 月刊日本館

Issue

12

特集 | Feature

季節は変わり、  
まためぐる



# The Great Cycle of Nature So Fragile, So Precious, So Beautiful.

どうしてだろう。めぐる季節の儂さを。枯れてまた咲く花を。  
循環する大いなる自然を。儂く、尊く、美しく思うのは。  
誰もが心の奥で知っている、美意識の声に耳を傾けて。

issue 12

Ever-Turning Seasons

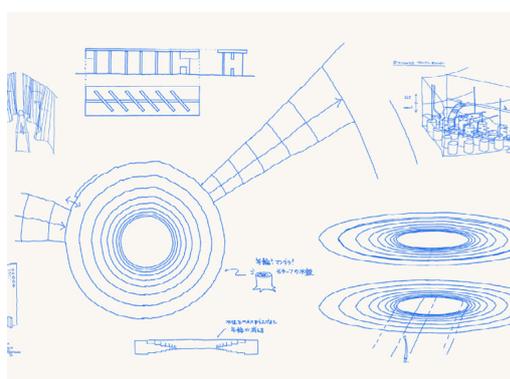
## 特集記事



### めぐりめぐる言葉の意味を辿って。 「循環」からひもとく日本の美意識

「循環」は文学を通じて育まれてきた？ 辞書編集者の神永さんと共に、日本の美意識にまつわる3つの言葉について考えます。

P.04



### 循環から見つめる、 日本的な美意識について

日本館の建築から展示内容に至るまで、全体に通底する「日本の美意識」。そこに込められた工夫や発想について、佐藤オキさんが語ります。

P.11



# めぐりめぐる言葉の意味を辿って。 「循環」からひもとく日本の美意識



### Index

- ・ 四季 - 言葉によって自然の美しさを捉える..... 5
- ・ 無常 - はかないからこそ美しい..... 6
- ・ 循環 - あらゆる思想に通底する「めぐりめぐる」価値観..... 8

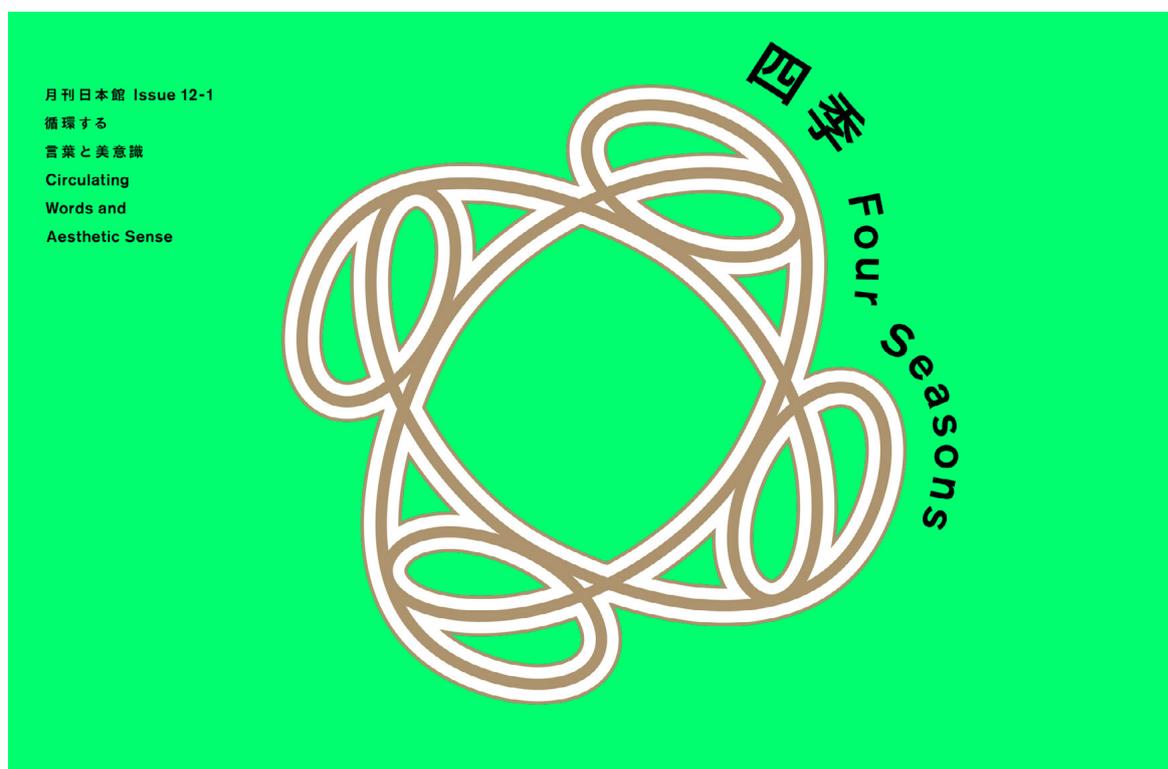
生態系、微生物のはたらき、リサイクル……、月刊日本館では、私たちの生活の周辺にある様々な循環のカたちをご紹介します。

しかし、大きな疑問が一つ残されていることに気がきました。この「循環」という言葉は、いつ、どのようにして生まれ、現在のような意味を持つようになったのでしょうか……？

最終号となる本記事では、辞書編集者の<sup>かみながさとる</sup>神永暁さんに、日本らしい価値観を表す3つの言葉の由来と変遷をお聞きしました。変わりゆく自然や気候を表現する「四季」、人の世のはかなさやうつろいゆく様子をあらわす「無常」、そして変化するモノやコトもいつかは繰り返すという意味を持つ「循環」。

ぐるぐるめぐり、繰り返す。なぜこの概念が、私たちの価値観に根付くことになったのか。言葉を巡るタイムトラベルに出発です。

## 四季—言葉によって自然の美しさを捉える



—四季は日本の文化や価値観と密接に結びついています。「四季」という言葉はどのように日本に根付いてきたのでしょうか？

**神永さん** 四季は文字通り春夏秋冬という四つの季節を表す言葉です。1年を季節で区分して捉える考え方は中国などの東アジア地域でも見られますが、この四季をどう感じ、どのように表現してきたかという点から日本独自の美意識を知ることができます。

四季への感性は文学作品を通じて洗練されてきました。平安時代に清少納言によって書かれた『枕草子』の冒頭、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫

「だちたる雲のほそくたなびきたる」はその代表的なものでしょう。日本では古くから季節の移ろいを細やかに感じ取り、言葉にしてきたのです。

——言葉によって季節への感性が育まれてきたということですね。

**神永さん** そうですね。日本語は季節を表す言葉にも、実に多様な表現があります。桜の花を例にとると、散った花びらが川面に流れる様は「花筏」、花が散って葉だけが残った様子は「葉桜」。ほかにも「初桜」(咲き始め)、「花明かり」(夜に明るく見える花)、「花がすみ」(霞のように見える花)、「名残の花」(最後に残った花)など、時間の経過による変化を繊細に捉えた、表情豊かな表現がいくつも生み出されています。これらの言葉は、単に現象を描写するだけのものではなく、四季の移ろいを捉える日本人の視点や感性が投影されたものなのです。また、それぞれの時期の自然現象や気候の特徴を表す「二十四節気」や、季節の行事を表す「五節句(1月7日の人日、3月3日の上巳、5月5日の端午、7月7日の七夕、9月9日の重陽)」といった考え方も季節感を豊かにしてきました。移ろいゆく季節を言葉で捉える感性は、日本の美意識の中心にあるものと言えるでしょう。



## 無常—はかないからこそ美しい



——「無常」は日本的な美意識を表す言葉として知られています。これは、もともとどのような意味を持つ言葉なのでしょう？

**神永さん** 無常とはこの世のすべてが移り変わり、同じ状態にとどまらないという意味の言葉です。日本での無常の使用例は非常に古く、奈良時代の『万葉集』にすでに登場しています。巻十

六の「世間の無常を詠める歌二首」では人の命のはかなさや、いつ死ぬかわからない不確かさを表現するために用いられていました。

——日本文学史の中で、無常という言葉はどのような変遷を辿ってきたのでしょうか？

**神永さん** 平安時代末期から鎌倉時代にかけては、貴族の世から武士の世へと移ろいゆき、治安の乱れも激しく、人々の不安が高まった時代。末法思想と呼ばれる現世を憂う考えが広まるなかで、文学における重要なテーマになった言葉が「無常」でした。鴨長明や兼好法師ら中世の僧侶によって書かれた隠者文学が、無常の解釈をさらに洗練させていきます。世の無常を観察し随筆を綴る過程で、彼らは世の無常を「はかないからこそ美しい」という美意識、つまり「無常観」へと昇華させたのです。『方丈記』冒頭の一節「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖（すみか）と、又かくのごとし。」は、実によくその時代の空気を表していると思いませんか？

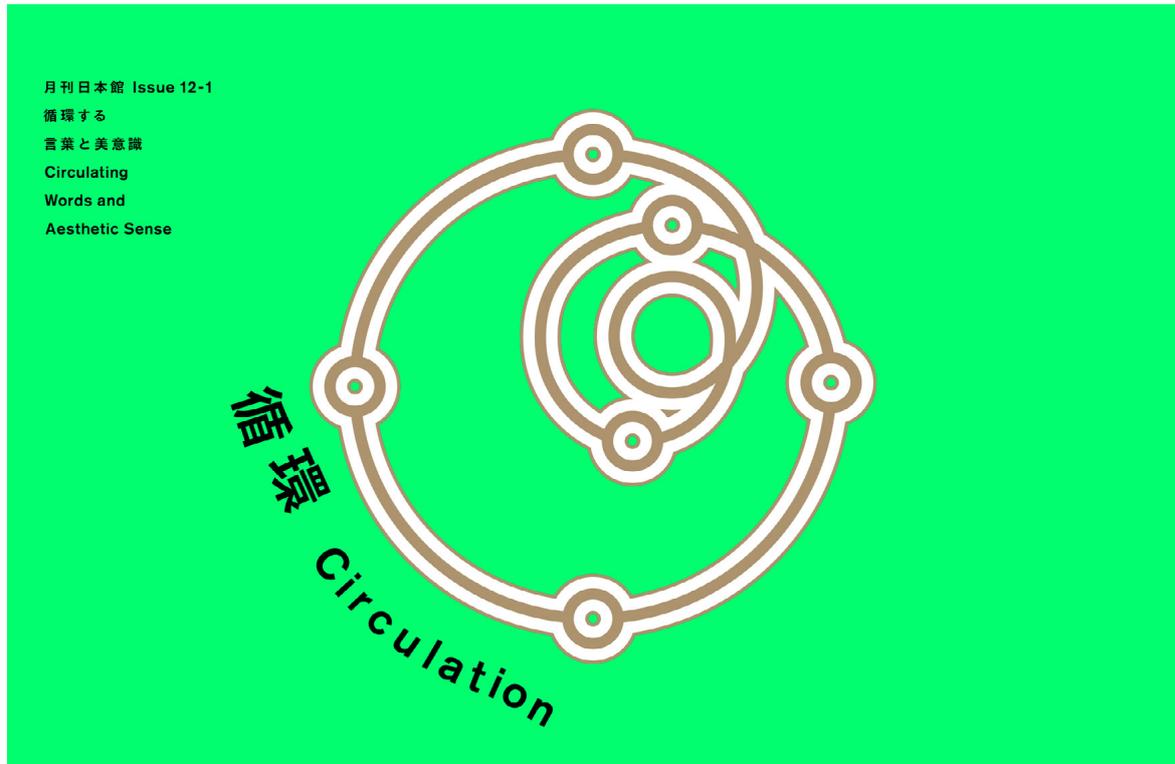
——はかなさに「哀しみ」ではなく「美しさ」が見出されたのですね。

**神永さん** 無常観は「わびさび」に代表される日本的な美意識や日本文化そのものにも影響を与えました。わびは質素で簡素な中に見出される美を指し、さびは古びた風情や冷え枯れた趣を美とする感覚のこと。これらの言葉の背景には、無常観に基づく「華やかさや完璧さよりも、不完全で移ろいゆくものの中に真実の美がある」という思想です。

茶道や禅の影響も受けながら、わびさびの美意識はさらに発展していきます。茶室の簡素な空間、枯山水の庭園、焼き物の歪みや欠けを愛でる感覚など、日本文化の様々な側面に表れていますよね。

また、日本語には「諦念（ていねん）」という言葉がありますが、これは「諦める=(見込みがないと断念する)」ではなく、「あきらめの境地に達すること」という意味を持っています。こうした言葉にも無常観からの影響が感じられますよね。時間とともに消えていくはかなさや、過去への哀しみは今日でも日本文学で繰り返し描かれる非常に重要なテーマとなっています。

## 循環—あらゆる思想に通底する「めぐりめぐる」価値観



—その上で伺いたいのが「循環」という言葉です。これはどのような語源を持つ言葉なのでしょう  
か？

**神永さん** 血液の流れ、生態系、リサイクルなど、いろんな分野で「循環」という言葉が使われていま  
すが、本来的な意味は「めぐりめぐって元に戻る」こと。「循」は「従う」「付いていく」、「環」  
は「円形につないだ輪」を意味します。この二つが組み合わさって「玉のようにぐるぐると  
巡って途切れないこと」や「めぐりめぐってまた元の所へ帰ること」を表す言葉となりました。

循環は、もともと漢語からきています。唐の文学者、白居易の詩文集『白氏文集』に納めら  
れている『贈別楊穎士・盧克柔・殷堯藩』に「循環」という言葉が出てきます。これは白居  
易が旅の途中、楊穎士・盧克柔・殷堯藩との別れに際して贈った詩。別れの悲しみが途  
切れず押し寄せる様を表しています。

「離憂繞心曲 宛轉如循環」  
訓読：(離憂心曲をめぐり、宛轉として循環のごとし)  
訳：別れの悲しみが心の隅々までまわりついていて、「循環」している(=ぐるぐるめぐって  
途切れようもない)かのようだ。

日本において「循環」という言葉が記録されている最古の文献は、平安時代に書かれた、  
菅原道真の漢詩文集『菅家文草』に収められている「五・賦葉落庭柯空(葉落ちて庭のえ  
だむなしきを賦す)」。こちら、心の動きを表すために用いられています。

「分任循環運、年如転轂衝」

訓読：分任、循環してめぐる、年は轂衝(=車輪の軸/こしき)をまろばすがごとし

訳：分任(=役職)というものは「循環」していく(=めぐりめぐってまたもとのところに帰ってくる)、年が車輪の軸をぐるりと一回転させるようなものだ。

——もともとは物理的な動きではなく、心や抽象的なものごとの動きを表す言葉だったんですね。

**神永さん** そうですね。時代が下るにつれて、循環は物理的な移動や運動を表すように変化していきました。江戸時代の初期に出版された『日葡辞書』という辞書があるのですが、これは、キリスト教の宣教師の日本語習得のためにポルトガル語で説明した日本語の辞書で、これに循環に関する記載があります。当時の読み方としては「ジュンクワン」というものですね。ポルトガル語で書かれている説明を翻訳すると「天空の回転」や「血液が体の血管を通過して自由に動くこと」を意味する、とあります。どのような経緯で物理的な動きを表す語になったのかは定かではないですが、江戸時代にはそのように用いられていたことは間違いないかと思えます。

——四季と無常という言葉にも「移り変わり」「繰り返す」という側面があったように思います。循環はもともと中国から入ってきた漢語ですが、日本の文化や価値観にも影響を与えた言葉なのでしょうか。

**神永さん** 日本文化においても「循環」は重要な要素です。例えば、日本庭園は流れる水や歩く人の視線が循環するように設計され、中でも回遊式庭園は、訪れた人が庭をめぐる間に様々な景色を楽しめるように工夫されています。茶道では亭主と客の間で茶碗が循環することに意味があり、同じ茶碗から茶を飲むことで心の交流が生まれるという考え方があります。

時代とともにその解釈は変化していますが、循環という言葉は日本的な価値観、美意識に通底した言葉として考えることができるでしょう。

——ありがとうございました。

**神永さん** 日本の折々の自然の中での暮らしから生まれた「四季」への豊かなまなざし。はかなきものに美しさを見出す「無常」の美学。こうした土台のもとに、めぐりめぐって、いずれ元の場所に還っていく「循環」の価値観は根付いていたようです。そして現代では、「循環型社会」を目指して、日本だけでなく、世界中で「circular(循環)」が語られています。「循環」という言葉は、ますます新たな意味付けと進化を求められているのかもしれない。

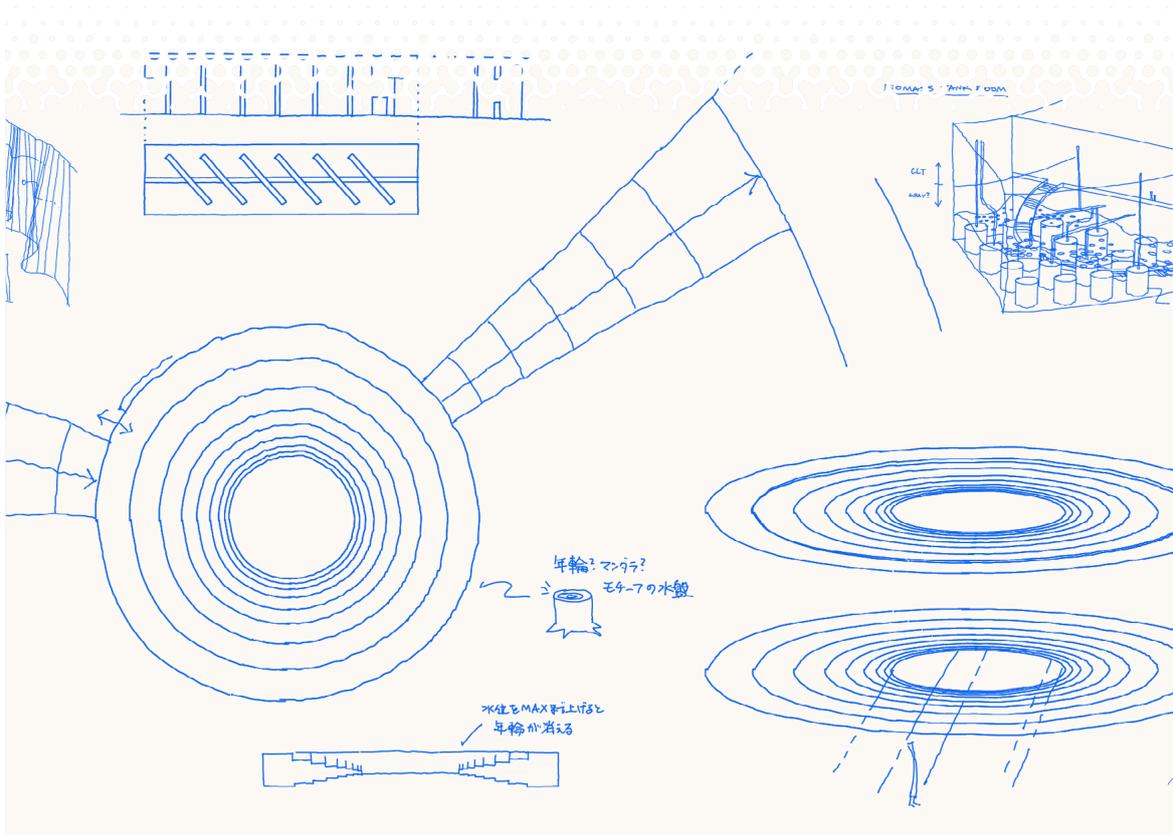


かみ ながさと  
**神永 暁**

1956年、千葉県生まれ。1980年、小学館の関連会社尚学図書に入社。1993年、小学館に移籍。尚学図書に入社以来、37年間ほぼ辞書編集一筋の人生を送る。担当した辞典は『日本国語大辞典第二版』『現代国語例解辞典』『使い方のわかる類語例解辞典』『現代国語例会辞典』『美しい日本語の辞典』など多数。2017年2月に小学館を定年で退社後も、『日本国語大辞典第三版』に向けての編纂作業に参画している。著書に『悩ましい国語辞典』『さらに悩ましい国語辞典』（単行本は時事通信社、文庫本は角川ソフィア文庫）、『辞書編集者が選ぶ 美しい日本語101』（時事通信社）、『微妙におかしな日本語』『辞書編集、三十七年』（いずれも草思社）などがある。



# 循環から見つめる、 日本的な美意識について



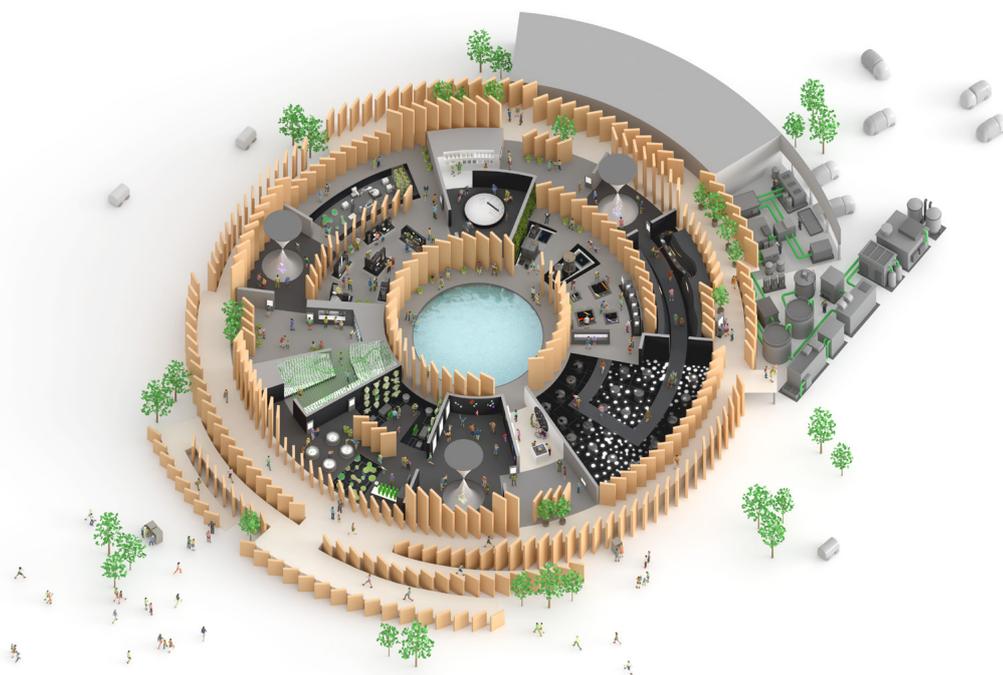
## Index

- ・ テーマと展示が、つながり合って循環する..... 12
- ・ 日本的な美意識って、どういうもの? ..... 16
- ・ 情報を理解するのではなく、感じてもらう空間を ..... 18

2025年4月よりはじまる大阪・関西万博。日本館は「循環」というキーワードを中心に、それを体現する建築と展示によって構成されています。

はじまりもおわりもない円環状の構造に、3つの入り口。再利用を前提とした木材による印象的な外観。そして展示は、生ごみの処理設備や藻類、そして火星の石まで、多岐にわたります。これらはばらばらなようで全てひとつにつながっている。日本館総合プロデューサー／総合デザイナーの佐藤オオキさんはそう語ります。

月刊日本館はこれまで、「循環」について多様な切り口で取り上げてきました。この記事では、「日本の美意識」という観点から「循環」について探っていきます。日本館の建築から展示内容に至るまで、全体に通底する「日本の美意識」を中心に、そこに込められた工夫や発想について、佐藤オオキさんに語っていただきます。



日本館の展示内容は、「まるごとガイド」で詳しく解説しています。  
建築デザイン、建築設計及び展示内装設計（基本設計、実施設計）：日建設計  
展示デザイン（基本設計、実施設計） 施工：日本館展示等コンソーシアム協同企業体（丹青社/乃村工藝社）



## テーマと展示が、つながり合って循環する

日本館のテーマ、「いのちと、いのちの、あいだに」は、「循環」というキーワードを元に生まれました。思想、科学、歴史、環境課題への取り組みなど、多様な要素を包み込むこのテーマはどのように決定されたのでしょうか。そして、日本館の展示内容はどのように形作られていったのでしょうか。まずは前提となる「循環」について伺っていきます。

——「循環」というキーワードはどのように決まりましたか？

**佐藤** 海外で開催される万博における日本館の役割と、今回のように日本で開催される万博における日本館の役割は大きく異なります。

前者は「今の日本」を凝縮し、パビリオンに訪れることで訪日したかのような感覚を得られることが求められます。

一方で後者の場合、「今の日本」は日本国内におけるさまざまな体験を通して知ることができます。だからこそ、大阪・関西万博における日本館の役割は、具体的な“もの”や“こと”の展示だけではなく、思想や考え方に踏み込むことが必要だと考えました。

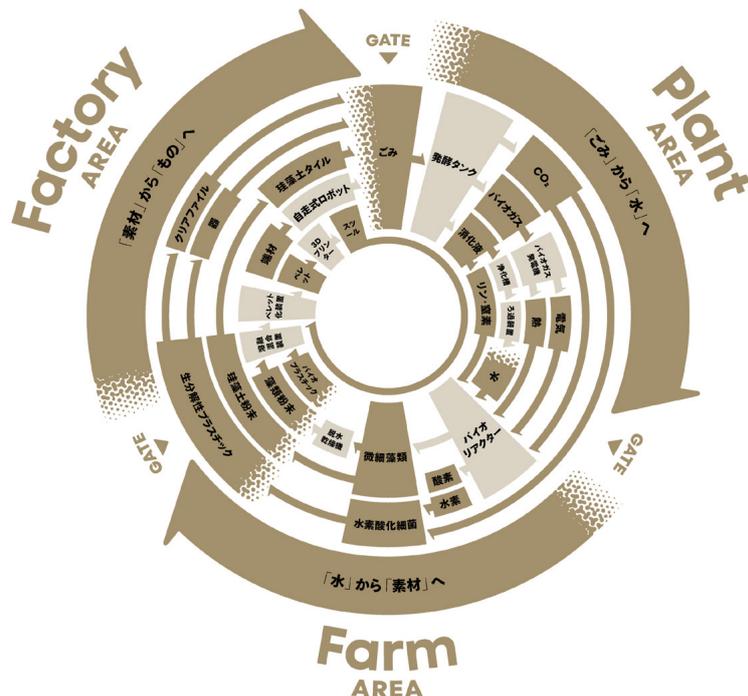
その中心にあるものは何か。調査・検討を進めていくうちに、日本文化には、自然との関わりにこそ大きな特徴や魅力があるということが改めてわかりました。自然環境を背景に生まれる「循環」。それは日本的な思想や歴史だけではなく、新たな社会を形作るテクノロジーともひもづきながら、未来を生きるためのヒントになりうるのではないかと。

——そうした考えが、「いのちと、いのちの、あいだに」という日本館のテーマにつながっているんですね。

**佐藤** 「循環」という言葉の解釈は幅広く、なかなか自分ごと化しにくいキーワードでもあります。そこで、できるだけちいさく、身近な要素に目を向けることが大切だと考えました。「いのち」そのものだけでなく、それらのあいだに潜むちいさな関係性を丁寧に伝えていくという考えが背景にあるからこそ、目に見えないちいさないのちを可視化したり、いのちがはかなく移ろいゆく美しさを感じてもらえる展示表現が多くなりました。

——循環を表現するにあたり、展示はどのように検討を進めたのですか？

**佐藤** プロジェクトを開始した2021年、まずは日本館の中を次々とリレーしながら循環していく要素を整理するところからはじめました。ごみや水、各種エネルギー、藻類、素材、プロダクトなど。それぞれの要素が、どこかで生まれ、役目を果たし、いずれ消えていく。人が生きる環境には、そんな循環の断片や、ちいさな循環が数多くあります。こうした要素をまとめて、チームで曼荼羅と呼んでいる概念図を作っていく中で、ひとつひとつのちいさな循環が複雑に絡み合い、全体の大きな循環が生まれるということが見えてきたんです。これを出発点に、コンテンツを考え、次に展示空間、それから建築、という順番で計画しました。この特殊なプロセスこそが、循環を体現する日本館を実現する上で、最も重要な要素だったと感じています。



日本館に登場する要素同士のつながりを概念的に表した、曼荼羅と呼ばれる概念図です。(※この図に記載されている全ての循環が、日本館内で完結していることを示すものではありません。)

——循環の中にある要素同士のつながりが日本館で体感できるということですね。

**佐藤** 展示がばらばらの事象にならず、目に見えなくてもつながっているように感じられるような体験を目指して、丁寧に設計していきました。  
藻類が家具や食べ物、あるいは珪藻土という形でアート作品の一部になっていたり、共通のデザイン・モチーフが随所で使用されていたり。ちいさな「つながり」がちりばめられて、それらを取り巻く「大きな循環」を感じてもらおう。そんな構成になっています。

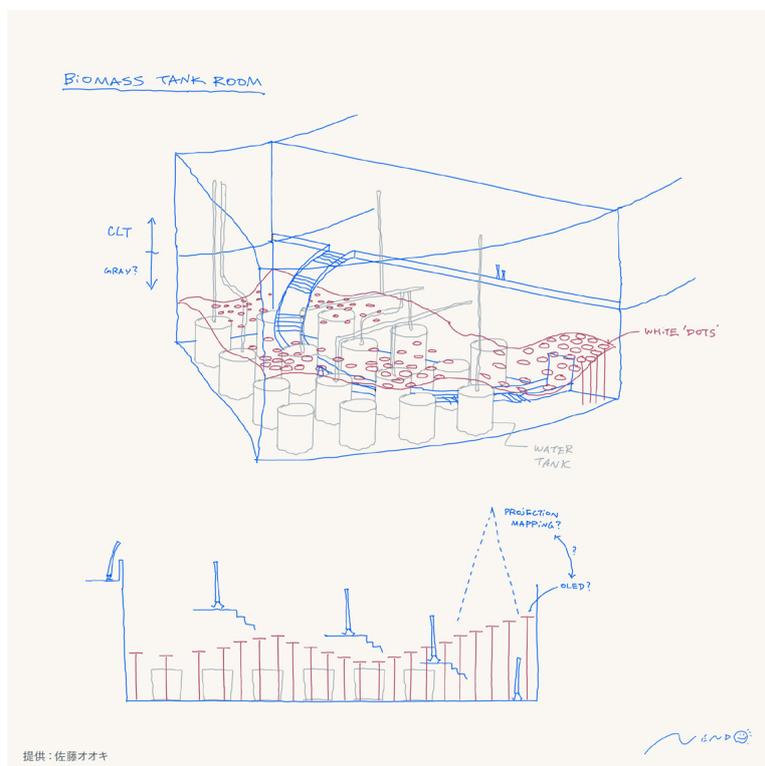
——「ごみを食べる日本館」や「生きたパビリオン」という言葉も登場していますが、どんな思いが込められているのでしょうか？

**佐藤** 日常生活において役目を終えた「ごみ」は、汚く、くさいものだというネガティブなイメージが一般的にあると思いますが、はたしてそれだけでしょうか。新しい視点をプラスすることで、個々のいのちの輝きが増し、より大きな循環へとつなげられるかもしれません。ごみが循環し、魅力的に生まれ変わっていく様子を体験することで、従来の意識に変化を促す。そのために、あえて日本館を生ごみ処理施設にしました。

日本館は、バイオガスプラントと呼ばれる、生ごみを分解して電気や水を生み出す設備と一体化しており、実際に万博会場で出る1日約1トンの生ごみをEVトラックで集めて処理する計画です。本来はものにとって「終の場」である生ごみ処理施設に、再生のための設備、先端技術とクリエイティブ、各種コンテンツを融合させることで、ショーケースの中に飾られた展示物ではなく、実際に稼働している状態をリアルに体験してもらいたい。本当の意味で「生きている」日本館を実現したいとの思いで検討を進めてきました。



バイオガスプラントでは、万博会場で出た生ごみを集め、水やバイオガスへと分解します。さらにバイオガスを使って電気を生み出し、日本館を動かすエネルギーとして活用されます。



Plant Areaの展示のひとつ、生ごみを分解するさまざまな微生物が活動する、発酵タンクをイメージしたインスタレーションの初期スケッチ。



## 日本的な美意識って、どういうもの？

日本館をひと目見ると、円を描くように整然と立ち並ぶ「木の板」に目を奪われます。木の板は、隙間を作ることでパビリオンの外と中を明確に分けず、「あいだ」という日本館のテーマにある言葉を来場者に意識させます。その背景にある「日本的な美意識」に話題は移っていきます。

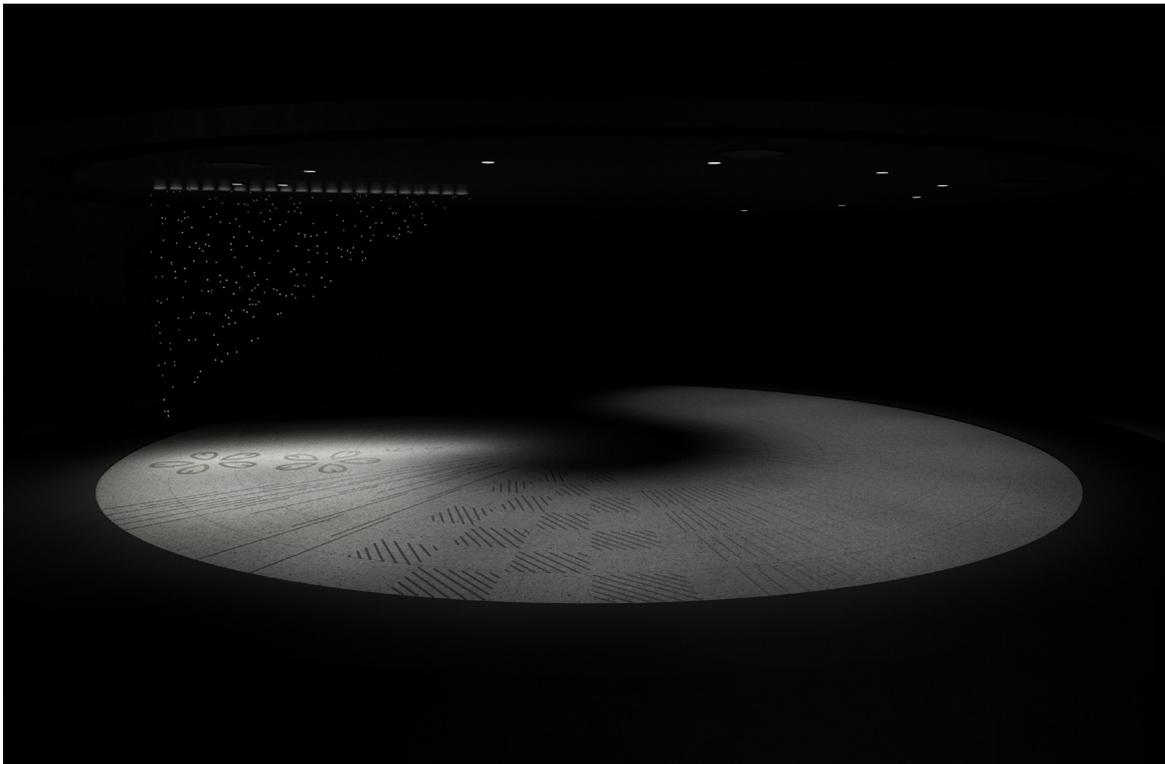
——日本館に込められている「日本的な美意識」について教えてください。また、それをどのように展示に取り入れているのでしょうか。

**佐藤** 先ほどお話ししたように、循環とは自然との関わり合いを背景にしています。「自然と対峙」する西洋的な考え方に対して、「自然と共生」する姿勢に、日本的な美意識が存在すると考えています。大きな循環の一部に自分が存在しているという実感。それこそが「日本の美意識」の中心にあるのではないのでしょうか。そうした姿勢は、特に「ちいさなもの」、「はかないもの」の捉え方に表れていると思います。

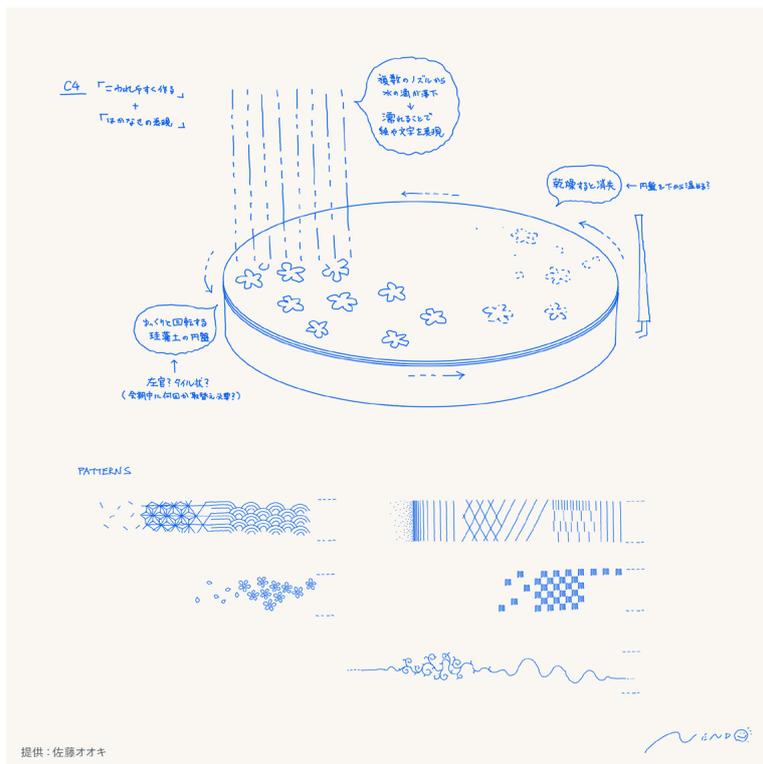
——「ちいさなもの」「はかないもの」とは、どういった物事を指すのでしょうか？

**佐藤** 日本人は、変わりゆく季節や自然に対して美を見出してきました。時間とともに変化する刹那的な美しさやはかなさに魅力を感じてきたと言えるでしょう。例えば散りゆく桜、瞬間的に夜空を彩る花火、しみじみとした灯火が消えゆく線香花火。その時、その瞬間を大切に愛でる文化、「はかないもの」だからこそいとおしく美しいと思える美意識こそが、日本らしさを表すものだと考えています。

あるいは、「目に見えないけれど、確かにそこにいる存在」に思いをはせるのも、また日本的と言えるかもしれません。日本館では、目には見えないほどちいさい存在でありながら、実は今も昔も人々の生活を支えている微生物にもフォーカスしています。生ごみを分解して燃料を作る細菌、味噌や醤油に欠かせない麹菌、未来の資源として期待されている微細藻類など。そうした「ちいさなもの」たちの営みを表現した展示を通して、普段は気にも留めない、けれど実は大切な存在に、目を向けてもらいたいと思っています。



Factory Areaの巨大な珪藻土のキャンパスに現れては消える「水のアート」。「はかなさ」をひとつの美しさとして慈しんできた日本の美意識を体現しています。



水で描く仕組みや模様を検証するラフスケッチ。直径6mを超える大きな円形に配置された珪藻土タイルの上に描かれるのはどんな模様なのか。ぜひ会場で確かめてみてください。

——「日本の美意識」の中心にあるとされる循環の感覚を、日本館の空間体験を通して表現する上で、  
どんなことを工夫しましたか？

**佐藤** 「はじまりがない、おわりもない」という円環上の構造は、まさに自然の循環を体現しています。また、各エントランスに入ると砂時計をモチーフにした展示空間があり、全て同一のデザイン構成であることで、何度もループし、別の形に生まれ変わっていくかのような体験を生みます。これは「循環」を感じる重要な装置になっているとも言えるでしょう。さらに、どのエントランスから入るかによって、展示を体験する順番が変わり、わずかに違った視点やストーリーを味わえることも大きな特徴となっています。来場者一人ひとりの体験の違いから生まれるその後のコミュニケーションなどにも期待しています。



## 情報を理解するのではなく、感じてもらう空間を

緻密に設計された展示体験を、実際に日本館に来場した方々はどのように受け取っていくのでしょうか。万博-host国のパビリオンとして、これまでにない建築と展示の融合に向けた挑戦や、予想外に立ち現れた美しい空間、そして日本館の楽しみ方について、最後にお聞きます。

——佐藤さんにとって、日本館の建築は、これまでに経験したことのないスケールだったと思います。その建築設計に、「内側を作り込みつつ、並行して外枠を決めていく」という難度の高い手法を導入した理由を教えてください。

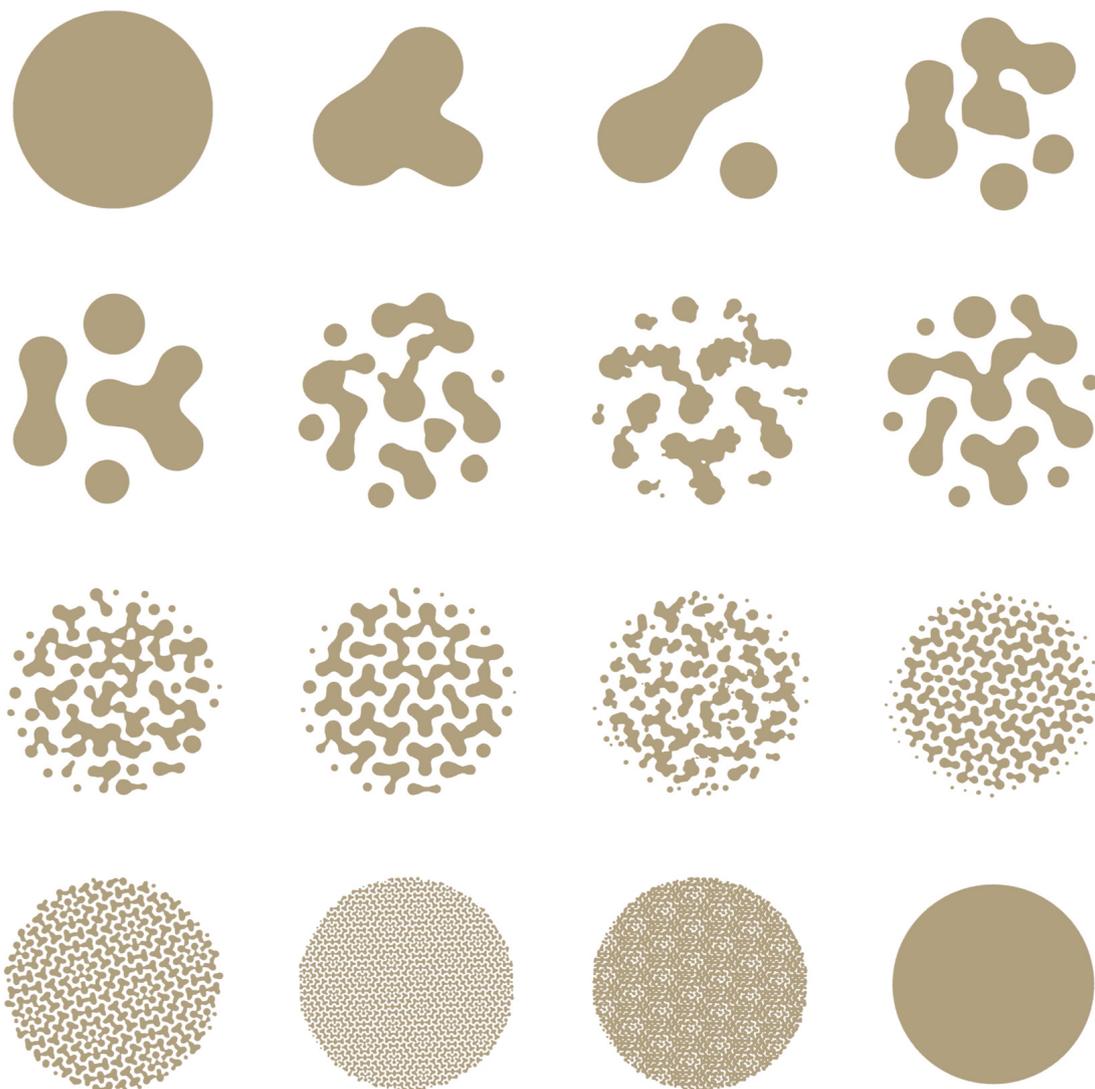
**佐藤** 常に「展示体験」を中心に考えたい、という思いがありました。「来場者が何をどう感じるか」を起点に、展示物や言葉、音響、内装や建築空間などがお互いに溶け合うようにしながら膨らんでいくイメージです。  
このように、ハードとソフト、あるいはアナログとデジタルを高いレベルで融合させようと考えた結果、あらゆる要素を同時に検討していくプロセスが必要でした。  
最終的には、来場者に「情報を理解」してもらう空間ではなく、「情報を感じて」もらう空間を目指しました。

——情報を感じるための工夫について教えてください。

**佐藤** 大きな声を出して注目させるのではなく、日本館はあえてちいさな声で「ささやく」ような表現を丁寧に積み重ねています。みなさんに耳を傾けてもらえたらうれしく思います。  
一見すると万博のパビリオンとしての派手さには欠けるかもしれませんが、まるでかめばかむほど味が出るスルメのように、じっくりと見れば見るほど新しい気づきやヒントに出会えるような、多層性や奥行き感があるパビリオンになることを目指しています。

——日本館全体のビジュアルシステムに込められたこだわりを教えてください。

**佐藤** ビジュアルシステムもまた、「堂々とした」「象徴的」なものではなく、常にはかなく変容し続ける、有機的で、まるで生命体のようなシステムを日本デザインセンターの色部義昭さんにデザインしていただきました。  
こうしたグラフィック表現が姿形を変えながら日本館のあちこちに、有機的に広がるように点在することで、日本館のテーマをより鮮明に際立たせてくれていると思います。

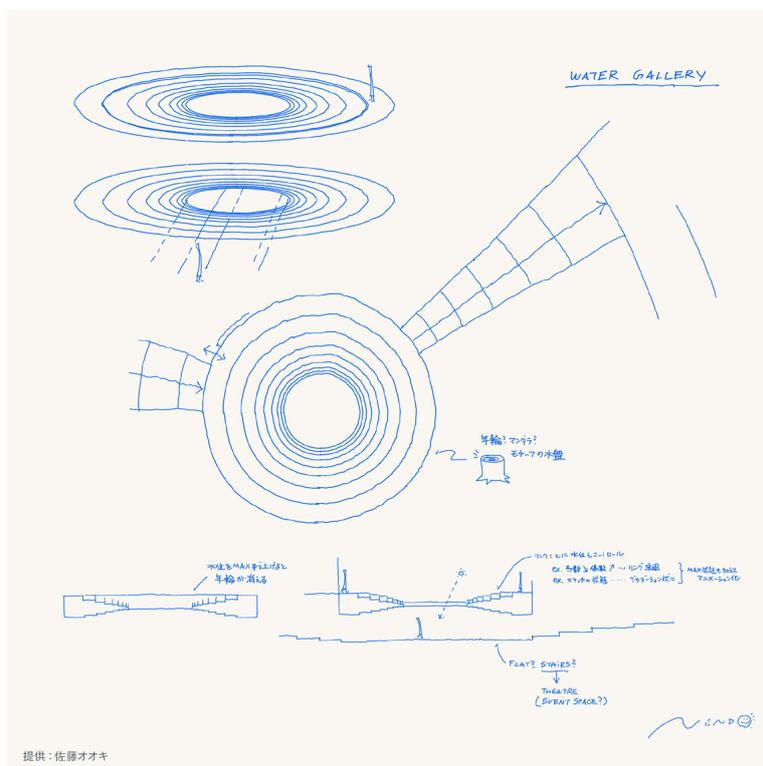


——日本館のプロジェクトを通して気づいた、「美しさ」の話があれば教えてください。

**佐藤** 日本館の中央にある水盤は、自分が予想していなかった表情をもって立ち現れたことに大きな驚きがありました。  
この空間は、中心がもつ求心力や意味性を考えた結果、具体的な“もの”を展示するのではなく「空虚」としています。  
中心にあえて意味を持たせないことで、円環状の循環が主体となるように計画したわけですが、実際に出来上がってみると、「何もないのに、日本館の全てがある」ような、静かでありながらもさまざまな感情が湧き上がる、不思議な美しさを感じています。



空に抜ける円形の中庭には、巨大な水盤が設けられています。Plant Areaの微生物の力によって純水に近いレベルまで浄化された透明な水が、光を美しく反射します。



水で描く仕組みや模様を検証するラフスケッチ。直径6mを超える大きな円形に配置された珪藻土タイルの上に描かれるのはどんな模様なのか。ぜひ会場で確かめてみてください。

——最後に、日本館の楽しみ方のヒントを教えてください。

**佐藤** 日本館の中には、さまざまなちいさな仕掛けが多層的にデザインされています。さっき出会った存在がまた別の空間でわずかに姿形を変えて登場したり、同じモチーフが繰り返されていたり、BGMなどにも「つながり」や「循環」が感じられる要素が潜んでいたりします。日本館のテーマは一見すると壮大ですが、そうしたささいな要素に目を向け、ちいさなつぶやきに耳を傾けてもらうことで新たな気づきや発見があると思います。



大阪・関西万博日本館 総合プロデューサー／総合デザイナー

さとう  
**佐藤オオキ**

1977年生まれ。2002年、デザインオフィスnendoを設立。国内外のデザイン賞を受賞し、主な作品は世界中の美術館に収蔵されている。クライアントは国内外多岐にわたる。現在は、フランス高速鉄道TGV新型車両のデザインを担当。

HP: <https://www.nendo.jp/>

プロフィール写真: Allan Abani